

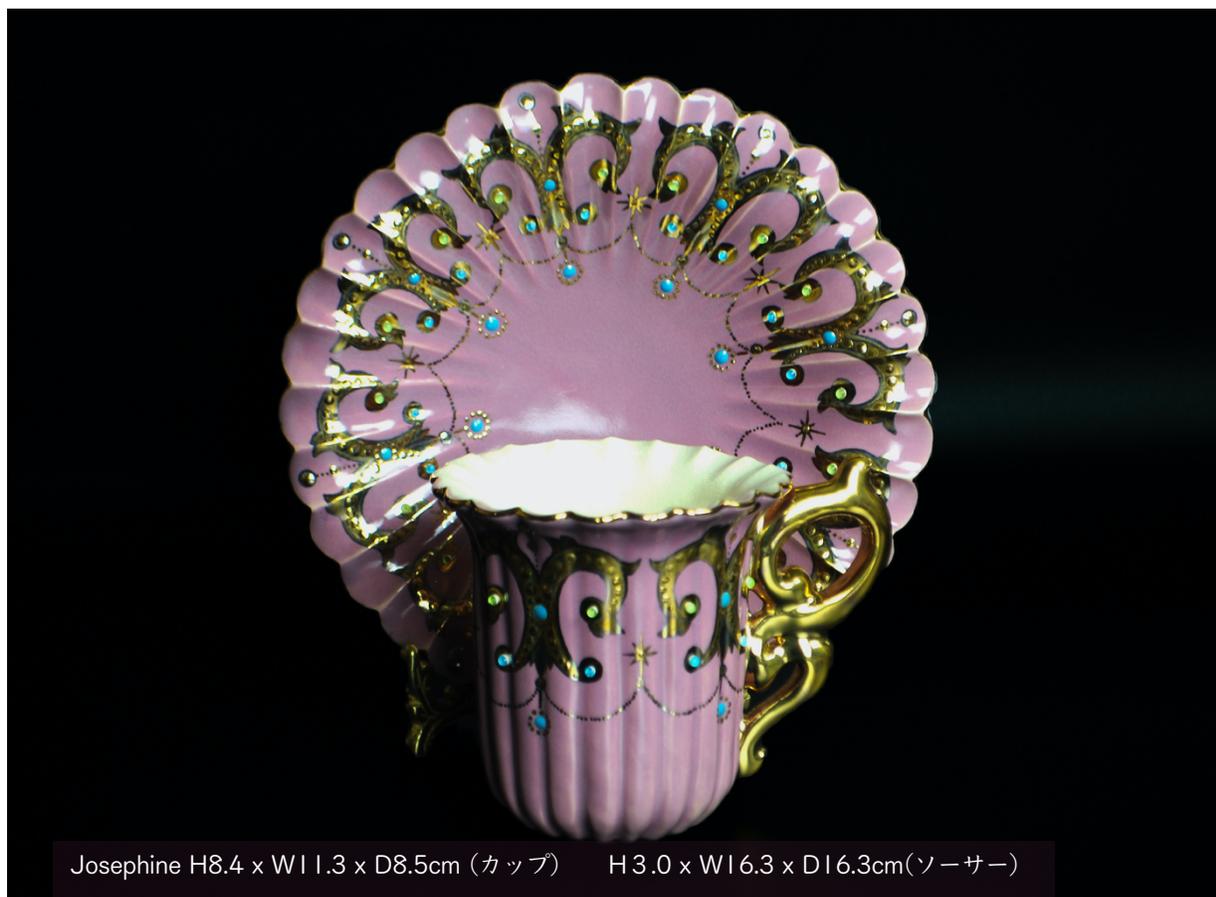
田久保静香

若手注目作家

2022年6月

田久保静香独占インタビュー（前編）

6月17日から開催の個展に向けてカップ&ソーサーに特化した制作を行う田久保静香さんを独占インタビューしました。カップ&ソーサー誕生の秘話、製造方法についてお聞きしました。



Josephine H8.4 x W11.3 x D8.5cm (カップ) H3.0 x W16.3 x D16.3cm(ソーサー)

桃青



田久保 静香 (たくぼ しずか)

1988年 千葉県佐倉市に生まれる

2015年 東北芸術工芸大学 芸術学部美術科工芸コース卒業

2017年 東北芸術工科大学芸術文化専攻工芸研究領域

深井聡一郎研究室 修了

現在は千葉県を拠点に活動中

—千葉県ご出身ですが、山形の東北芸術工芸大学にご進学を決められたのはどうしてですか？

田久保:第一志望にいけず浪人していたのですが、最後の浪人の年に東北芸工を受けさせて頂きました。各大学に陶芸の色が濃くあって、たとえば伝統工芸だったら東京芸大、立体造形物は多摩美、武蔵美にいけばデザインよりの工芸など色々あると思うのですが、その中でも東北芸工大はまだ新しく、いい意味で色がなかったのが大きな理由でした。浪人中、色々な大学にこっそり潜入調査にいったのですが、東北芸工大が少人数制の教育方針をとっているのももちろんですが、一番先生と生徒との距離が近いように思えました。また山形は田舎で遠方から来られる先生方はみんな泊まりで来られるので、その際は皆でお酒を交えながら食事をして密な会話が繰り広げられるという情報も得ていたもので、それもきっかけの一つとなりました。

大学生活は仲間に囲まれてとても楽しかったですが、それでも第一志望にいけなかったコンプレックスというのは凄くありましたね。田舎なのでギャラリーが近くにある訳でもなかったですし、山にこもって見えない敵と戦うような感じで生き急ぐように制作をしていました。でもそれもまた大きなエネルギーになったように思います。

—陶芸を始めるようになったきっかけを教えてください。

田久保:私の場合は陶芸をすると決めて大学に進学した訳ではなく、建築や舞台美術を勉強しようと思っていました。ただ勉強していくうちに個人で仕事として成り立つものを作りたいと思うようになり、もともと骨董市に行くほど陶器が好きだったこともあり、この道を目指すことに決めました。しかし大学で美術史を勉強していくうちに器という存在が、絵画や彫刻に比べると美術の底辺として認識されていること、自分が思う器の価値とズレがあることに気が付きました。なので器を美術として成立させる必要があると思いそれが今の作風に繋がっています。

桃青

一どのようにして田久保さんのカップ&ソーサーが生まれたのでしょうか。

田久保：作品との向き合い方として、私は大量生産ではなく、作品と一つ一つ長く時間をかけて勝負をしたいと思っていました。それを軸として考えた時、茶陶か、立体造形物か伝統工芸かの3つの分野で選択に迫られました。3つの中から選択をしなければいけないと思い悩んでいた私に彫刻家であり教授であった深井聡一郎先生が私にこう声をかけてくれたんです。“新しい分野をお前が作ればいい。その為には歴史を学び、現代を知り、未来を創造しなさい”って。その言葉にハッとして、その通りだなんて思ったんです。その3つの分野に囚われることなく、自分が美術だと思える分野で勝負をしたらいいんだって思えたんです。もともと家に紅茶のコレクションがあるくらい大の紅茶好きだったので、そこからカップ&ソーサーという分野は自然な流れでしたね。紅茶の歴史を勉強していくうちに、西洋で発展した紅茶文化というのは、日本の茶道の影響を受け発展していった事を知りました。今でこそ西も東も関係ないのかもしれませんが、日本の影響を受けて発展した西洋の文化を逆輸入するような感じで取り組めたら面白いなと思ったんです。また西洋のカップ&ソーサーは機械での生産にシフトしていった産業革命の影響を色濃く受けているので、そんなカップ&ソーサーを一点一点手捻りで日本の独自の手法で取り組むのは新しいんじゃないかなと思いました。

一作品のインスピレーションはどこから来るのですか？

田久保：作品のインスピレーションは本を読む事によって来ます。大学院では現代陶芸史、明治以降の陶芸史、お茶史、カップ&ソーサー史を学びました。日本の茶道文化が西洋に行き渡りどのような受け入れ方をされ、どのように文化として変化していったのかはとても興味深く、紅茶文化に尽力した貴族達もいたので彼らから連想して作品の想像を膨らませたりもしました。またエリザベス女王の肖像画にハマっていた時期もあって、エリザベス女王の個性的なドレスパターンやコルセットからデザインを起こしたりもしました。また自分のオリジナリティーを入れる為にファッション紙も読むようにしています。

この記事の表紙に載っている作品はナポレオンの最初の奥さんである Josephine から連想させて制作しました。作品の表面の縦線はフルーツという装飾様式で、マリーアントワネットの時代に流行していたロココ調がナポレオンが政権をとった事によって取って変わられ出てきた装飾様式なんです。家具のデザインにもよく使われていて、カップ&ソーサーにも用いられるようになっていたのでそこからヒントを得ました。

桃青

—とても均等に見えますが型は一切使っていないのでしょうか？

田久保: そうですね。こういう形って型を使ってこそ活きる形なのかもしれないですが、そこを私は半磁土で、型を使わず、取っ手も含め全て手捻りで行っています。

—製造方法について詳しく教えてください。

田久保: 素焼きは作品によって異なりますが、700 から 800 度の間で行います。やすりを使って仕上げるものは固めに焼くので 800 度くらいまであげますね。今回の表紙の作品は特に固めには仕上げず、750-780 度で素焼きをしています。

使用しているのは電気釜で 13-14 時間くらい本焼をします。この時はまだピンクと白の状態ですね。そこから、下地の装飾をして 800 度くらいで焼き、更に温度を下げて表面のビーズを焼き付けます。ビーズも色によって溶解温度が異なるのでそこも加減しながらですね。そして、更に温度を下げて金とパラジウムを焼き付けていきます。



(写真: Josephine 下地の装飾途中)

上絵ですが私は絵が苦手なので、点でデザインすることが多く、筆や爪楊枝のようなものを使いながら線付けしていくイメージで制作しています。

桃青

—田久保さんの貝殻をモチーフにした作品も魅力的ですが、このシリーズについて詳しく教えてください。

田久保：貝殻をモチーフにした作品のタイトルは Marcella といいます。磁器の英語が“Porcelain”でその語源はイタリア語の宝貝”Porcella”からきていると言われています。西洋で磁器が生産されるようになったのは日本や中国に比べるとだいぶ後で 250 年もの間、錬金術で磁器を作ろうとしていた時代があったんです。びっくりですよ。当時磁器の生産が難しかったからこそ、磁器の様に美しいとされていた貝殻が人々に愛されるようになったと言われています。なので磁器の生産に成功したあとも、貝殻をモチーフとしたカップ&ソーサーは沢山作られ、今でも伝統として作られ続けています。窯によっても貝殻の表現方法も様々で、沢山の種類があるので、私もそんな貝殻をモチーフにした作品をつくりたいと思い始めました。



(貝殻をモチーフにした Marcella シリーズ)

後編では田久保さんに影響を与えた陶芸家や日々どのような思いで作陶をされているかなどをお伺いしています。お楽しみに。

<<<後半に続く>>